慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

· · ·	
Title	ボアギュルベールの「富の本質論」:フイジオクラアト学説の出所再吟味
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.7 (1932. 7) ,p.1206(86)- 1243(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19320701-0086
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320701-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボアギュルベールの「富の本質論」

―フイジオクラアト學説の出所再吟味-

ラアトの學說中主要の點として、特に注目に値するもの六項を掲げ、更に其の中ケネー一派の主張として、最も顯 著に知らるゝものとして、(一)自然法を信率し、自然の秩序と云ふことを重じたること、(二)教育を重大視し、放 任主義を高調したること及び(三)専ら農學を主とし、農業を尊重したることの三項を摘出し、而してフイジオクラ れが基く所を研究せられたる結果、其の出所を以て明確に支那學説に外ならないと結論せられてゐる。 を首領として儼然たる一つの學派を形成してゐたことよりして、以上の三點に付き、專らケネーの所說に付い トが其の前代に榮えたるマーカンチリストの如く、各自銘々に勝手の意見を唱へたるものにあらず、殆ど皆ケネ 瀧本博士は本誌第二十卷第八號所載の論文「フイズイオクラートの學説の出所」の中に於いて、先づフイジオク

重農思想(二)自然法乃至自然的秩序及び自由放任の思想(要之、自然的自由の思想)及び(三)財政改革の思想 政改革の一點を加へて三つとし、此の三點を以てフイジオクラアトの學說の根幹を成すものと思惟する。即ち(一) 筆者は先づ博士の目してフイジオクラアトの最も顯著なる主張とせられてゐる以上の三點を二つに纏め、別に財

乃至自然的秩序の學說であると做し、此れを出發點とし、同時に、重要視したのは、ケネー其の人よりも、ケネー 然的秩序の思想を論じ、次いで重農思想を述べてゐる。C註三) の正系の門弟、殊にメルシェ・ド・ラ・リヴィェール〈註一〉及びデュポン・ド・ヌムール〈註二〉であつた。而して今日フ るかは、博士も云はるゝが如く、識別すること困難であるが、然しフィジオクラアトの學說を以て先づ就中自然法 夢いたのか、それとも自然法思想が彼等をして農學研究に興味を深からしめたのか、共の何れが主たり何れが客た これである。そこで此の三大根本思想中前二者に就いて觀るに、一體農學研究がフイジオクラアトを自然法思想に ジオクラアトの學説を論述する多くの學者は、概して、此れ等ケネーの門弟の所說に従つて、先づ自然法乃至自

と共に、中世農業經濟局想は排除せられ、茲に大體に於いて商工業本位の思想が唱へらるゝに至つた。勿論マーカ 想の順序をとるべきものであり、而してフイジオクラアトの重農思想は、其の本質に於いて商工業的なる前代のマ 筆者はフイジオクラアト、殊にケネーの學說體系は先づ重農思想,次いで自然法乃至自然的秩序及び自由放任の思 及び自由放任の思想が極度に重要視せられたるに反して、聊か過度の侮蔑の的たるに過ぎなかつたのである?註四) 性に於いて遙かに劣るものとせられる。否、久しき間、フイジオクラアトの重農思想は其の自然法乃至自然的秩序 イアン、(註五)コルベル、(註六)何れも熱心にすら農業的利益を主張したものである。然し彼等の思想傾向が大體 チリスト就中佛蘭西の所謂コルベルチストが全然農業的利益を否認したと主張することは正確でない。モンクレチリスト就中佛蘭西の所謂コルベルチストが全然農業的利益を否認したと主張することは正確でない。モンクレ カンチリズムに對する反動として生じ來つたものであると思惟するものである。周知の如く、マーカンチリズム 然し、フイジオクラアトの學說の諮部分の本質的價值若しくは其の重要性はともあれ、此れを歷史的に觀れば、 彼等に依れば、フイジオクラアト學說體系の根本觀念は自然的秩序であり、重農思想は此れに比すれば其の重要

最も有利なる競爭をするために、必然勞働者の生活必需品、殊に小麥の價格を低廉ならしむる政策を採つたのであ 徴税制度に依つて一入助長せしめられたのである。 《註八》 られ、共のために農民階級の貧窮を誘致したことは茲に縷述するを要しないであらう。此の農民の貧窮化は更に路 易十四世の非政、殊に外に對する無暴なる屢の出征と内に於ける放肆なる奢侈、從つて必然誘致せられた苛酷なる ンチリスト殊に所謂コルベルチストは勞働を廉價に購入して製造品の原價を低廉ならしめ而して外國市場に於いて に於いて農業的利益に背反するものであつたことは否定し得ない。此れを具體的政策に觀れば大體に於いてマーカ 誰七)從つてマーカンチリストの政策の進展の結果、農耕者、殊に小麥の生産者に異常の桎梏と負擔とが課せ

窮乏を誘致するものである。 ために播種し、耕耘し而して收穫する勞苦から救はれるのだ、故に彼等は其の播いた麵麭を缺かないのが當然であ ものを發してゐる。彼等は真直に立上ると、人間らしい顏付きを見せる。否、實際、彼等は人間なのだ。彼等は夜 ざめて日に焼け、地にこびりつき、何物にも打克つ頑强さを以て土地を掘り耕してゐる。彼等は明瞭な言葉らしい る。」(註九)と。然るに、彼等は食に窮し群をなして死んだ。(註一〇)然も農民階級の貧窮は必然社會の諸他の階級の Théophraste traduits du Grec, avec les Caractères ou les Mœurs de ce siècle, Paris, 1688, chap. X. De l'hom-になれば茅屋に歸り、其處で黑麵麭と水と草木の根とを食べて生きてゐる。彼等あればこそ他種の人間は生きんが 當時農民の慘狀を敘述せる多數の著者の中で、殊にラ・ブルエール(La Bruyère)が其の著"Les Caractères de の中に描いてゐる農民の姿は悲壯である。曰く、田園の到る處に、牝牡の、一種の野獸が見られる。黑く、青

フェネロン (François de Salignac de la mothe Fénélon) は其の "Remontrances à Louis XIV, 1694." の中

蘭西の普遍的窮乏は路易十四世の治下、 而して時局は正に此の言葉の通りであつた。此の儘に推移すれば軈ては國家的破産たるより外はなかつた。 王よ、慙愧の至りではないか……然し人民が麵麭を缺く限り、王自身も亦金銀に窮するものである。」(註一一)と。 努めてゐる麵麭を王の戰の爲に租稅として剝奪することに依つて、彼等を絕望せしめ無慘にも死に致らしむるとは 招いたのは、王自身の致す所である。何故と云ふに、全王國が破滅せんとしてゐるのに、王は手中に凡ゆる物を有 い…・王は、求め喞つて已まざる多數の人民に依つて迷惑がられてゐる。然かも、王よ、身に斯かる一切の困苦を 捨を為し而して彼等を養はねばならぬのである。全佛蘭西は最早や惟だ荒凉として貯へ無き一大施療院に外ならな を養つてゐない。凡ゆる商業は殲滅してゐる…:故に斯かる貧窮せる人民から金銀を獲るのでなく、寧ろ彼等に施 土地の耕作は殆ど拋棄せられてゐる。田舎も又都市も住民は絕えてゐる。凡ゆる職業は萎靡沈滯して最早や勞働者 し、從つて人民は王の施與なしには生きで行くことが出來ないからであるし に於いて曰く「王が我が子の如く慈しみ又從來王のためには水火の苦をも厭はなかつた王の民は、餓死してゐる。 殊に其の後年に至つて絶頂に達したのである。 - 然るに人民が額に汗して獲得せんと 即ち佛

ば彼等に依つて時局は救濟せられたか。否,何となれば、彼等は何れも皆單なる彌縫策を提言せるものに過ぎなか 策が最も普遍的に研究せられた時代であるが、殊に路易十四世の治下に於いては恰も萬人萬策を提言するの觀を呈 **した。即ち此等對策の研究に關する當時の著書及び小冊子は實に無慮一千二百の多きに達してゐる。(註一二)然ら** の財政の救濟若しくは改革運動として現れた。佛蘭西史上第十七世紀及び第十八世紀は經濟的、 茲に於いてか、何等かの對策運動は必然起らざるを得なかつた。而してそれは先づ差當り、 換言すれば、當時の窮狀は此れを誘致せる根本的普遍的原因にして廢除せられざる限り、斷じて救濟せられ 逼迫し紊亂せる當時 殊に財政的第乏對

得ざるものであつたに拘らず、彼等は此の簡單にして重要なる一事を認識しなかつたからである。彼等の一時的窮 策を以て逼迫せる時局を真に救濟することは固より不可能であつた。

(註一三)デュパン、(註一四)及びグウダル(註一五)等これである。而してそれは最後にケネーを首領とするフイジオ た。ボアギュルベールこれである。次いでそれは第十八世紀の前半を通じて旺盛を極むるに至つた。エルベー クラアトに至つて正に共の絶頂に達したのである。 に於いて、マーカンチリズムと相反する觀念の上に立つ此の新運動は第十七世紀の末葉先づルアンの一角より現れ かにマーカンチリズムであつたのである。故に常時の社會經濟狀態に對する批判的反動的運動として茲に重農的自 に對する批判的反動的性質を有するものであつたことは必然の勢と云はねばならぬ。即ち彼等の批判の對象は明ら も、旣述せるが如く、時弊にして大體マーカンチリズムの所産であつたとすれば、此の新運動がマー るを得ない氣運は旣に充分釀成せられてゐたではないか。時代は正に斯かる新運動を要求してゐたのである。 **田的運動は當に唱道せらる可くして唱道せられたのである。其の間には必然的關係が存したのである。而して大體** 然らば此等の一時的糊塗的救濟運動に代つて當時の社會經濟狀態に對する根本的改革的批判的新運動が出現せざ カンチリ ズム

所に闘する限り、 秩序より發して此れを主としたものであると思惟するのである。從つてフィジオクラアト、殊にケネーの學說の出 の如くに重要視せらるゝに至つた、即ちケネーは重農思想より發し此れを主としたるに反して、彼の門弟は自然的 其の自然的秩序の思想は寧ろ後にケネーの門弟に依つて敷衍せられ、彼等に依つて恰もフイジオクラアトの全學說 筆者は故にフィジオクラアト、殊にケネーの學說の出發點たり根本たるものは正に先づ重農思想であり、〈註一六〉 それは重農思想の由來の檢討に初まるべきものであり、 而して其の由來は當然マーカンチリズム

の批判に溯るべきものである。

長したれば其の本職の醫者であつたに拘らず、平生農學に就て多大の興味を有し、其の佛國王の宮中にあるや同僚 支那歴史(註一七) などを讀み、同國の制度の完備したることを知り、且つ共の制度が自分の意向に投じて深く感じ 彼を目するに農學狂を以てしたるが如き事實より之を推測すれば、……彼は豫て農學を研究しつゝ偶まヅ•ハルドの の重農思想の出所に言及せられて「故にケネーが自然法に最も重きを置くの學者として農學を人世最要の學問とな 業に依つて起り、農業は又自然法の信用に依つて奨勵せらるゝに至つたものではあるまいか」と做し、更にケネー 道人事の軌範となして居つたのである。故に農業を主とする國民は自ら迷信的に天を信仰するが如く思はるゝも、 立國の本とする太古の國民に於ては、概ね皆物理的法則と道德的法則とを混同し、自然法の觀念の下に合致して天 し農業を社會最重の職業となしたるは決して偶然の事ではあるまい、「然かも「ケネーは農民の子であつて、農家に生 なる人力を以てするも、天道に反し、天理に背きて、成功すること能はざるが故であるこ「即ち自然法の觀念は農 是れ亦止むことを得ざる必然の結果である、何となれば農業其の物は常に天時天候に依賴するものであつて、如何 事すれば自ら自然法の觀念を起し、自然法を信認すれば、自ら農學の興味を起すべきは明かであらう、」「農學を重 而して自然法思想と重農思想との關係を論じて「此の二つの事は最も密接の關係を有するものであつて、農學に從 じ農學を研究する者が、自然法の觀念を生じ、自然の秩序を信ずるの傾向あるは、當然のことにして、農業を以て て説いてゐる所を根據として、ケネーの自然法思想を支那太古の學說に淵源せるものであるとの新說を立てられ、 つて「エフェメリッド」(Ephémérides)誌上に掲げた論文「支那の專制政治」(Despotisme de la Chine)の中に於 瀧本博士は前掲論文中に於いて、先づケネーの自然法思想を論じ、大體ケネーが一七六七年の三月乃至六月に渉

たる結果が、後年に於ける彼の經濟學說となつて現はれたるものにあらざるかと思はることでケネーの重農思想を も亦支那先王の制度及其の學説に影響せられて生成したものであるとせられてゐる。

論述せられてゐる箇所の無いのは、學者の思想と社會の事實との密接不可靡の關係を力說せらるゝ博士平生の所論 ない。筆者は先づ博士の所論中何處を探して見てもフィジオクラアトの學說を當時の時代的背景との關係に於いて である。成程フイジオクラアトの學説の出所に闘する斯かる者察は極めて論理的に出來るであらう、殊に博士の支 ぶ所がないのである。即ち筆者はフイジオクラアトの學說と當時の哲學思想との關係を强調する說、及び彼等を以 の所謂支那的起源說も亦、筆者を以て觀れば、實に博士が目して採るに足らずとせられてゐる此等の所說と何等選 るべからざるものたることはルネ・ゴンナアルの云へる所であり、〈註一八〉瀧本博士も亦前拐論文中に於いて「根據 說を樹立せんと專念せる、全く抽象的、先驗的、演繹的方法論者であると說く學者のあるを知る。此等の所說が採 て全く抽象的、先驗的、演繹的方法論者と做す說と共に、博士の所謂支那的起源說にも亦斷じて賛同し得ざるもの なき憶説」であるとせられてゐる所であるが、 ら受けた思想を惟だ經濟學的に飜譯し置換へたものに過ぎないと說き、又彼等を以て基本的公理の基礎の上に一學 的起源説に至つては全く着眼の奇抜以て耳目を欹たしむるに充分である。然し此れを共の儘承認することは出來 吾人は屢フイジオクラアトの學說と當時の哲學思想との關係を强調し、フイジオクラアトを以て當時の哲學者か に徴して頗る奇異の感を抱かしめらるゝものである。 然かも博士が依つて以て此等の所説を論駁し得たりとせらるゝ博士

(註二〇)彼等の研究の對象は明らかに「富」にあらずして「政治」であつたのである。(註二二)彼等は斷じて純理を 然かも、周知の如く、「フィジオクラアトは單に一經濟思想團體ではなかつた。彼等は政治運動團體であつた。」

憾なく曝露せるものであつた。彼等が此れを看過する筈は無かつたのである。現にケネーは其の最初の經濟學的論 (Fermiers)の中に於いて農民の窮狀を敍し、其の三大原因として(一)直接稅(taille) 兵役(milice) 及び無償勤 文、即ち一七五六年にディデロ 極めんとしたものではなかつたのである。彼等の研究の對象は彼等の眼前に曝露せられてゐる當時の現實の狀態で 撤廢して生産の増大を計り、又貧困なる農民に課せられてゐる過當の租稅を廢止して彼等を鼓舞するの要を主張し 輸出の自由放任の必要を主張し、更に注目すべきことには、耕作費用を詳細に研究し、又農業に於ける牛馬の使用 務(corvée)等農村に對する過重の負擔に依る農村子弟の都市移住從つて誘致せらるゝ資本及び勞働の中央集中化 を驅逐し、佛蘭西が奢侈品の製造場と化しつゝあるを指摘し、非難し、而して更に精緻なる計算に依つて商工業立國 を奬勵し、是を使用せざる農民の貧困を精細に敍する等、當時の農民の實生活に即した、極めて實踐的技術的農業救 の傾向、(二)農業的投資者に對する其の資産を脅す不當の課稅及び(三)穀物取引に對する種々の妨害的制限を指 てゐる《註二四)尙彼は同辭書に「明證」(Evidence)、「人間」(Hommes)、「租稅」(Impôts)及び「利子」(Intérêts)を の不利を説き農業立國の要を强調し、佛蘭西が南工本位主義を棄てゝ農本位主義に立歸る時は現在と比較して國富 に同辭書中に寄せた論文「穀物」(Grains)の中に於いては、コルベルチスムの遺策が佛蘭西國土から農業的生産物 濟意見を述べて、結局一國農業の損失即ち國民的富の減少を來たすものなりと論斷して註ニ三〉次いで又一七五七年 つた。〈註二二〉然かも共の狀態は、旣述せるが如く、マーカンチリズムの餘弊とアンシャン・レジイムの悪弊とを遺 『剩餘が約五倍に達すべきを説き、其の手段として現在佛蘭西が農場、果樹園就中葡萄園に加へてゐる種々の制限を 一之が對策として兵役の義務の民兵に對する免除、不當不公平の稅制の改革及び穀物の自由交易、 (Diderot 1713-1784) の「百科辭書」(Encyclopédie) 中に寄せた論文「小作人」

的政策的思想であつたと思惟せられるのである。即ちケネーは、ボーヴァンをして「十分一税論」を、又ボアギ が、彼の此等の初期の經濟學的著作の中に現はれてゐる思想は何れも極めて實證的、實踐的且つ屢卑俗的ですらあ する興味ある問題」(Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce.)(註一五)を發表した たのである。 ルベールをして其の諸著を書かしめたと同じ時代的影響の下に先づ寧ろ卑近な重農思想及び租稅改革思想を表明し の觀察の上に基ける實證的思想、及び直接實際的效果の獲得 つたのである。故に當時のケネーの思想體系を求むるならば、それは少くとも當時の現狀に立脚せる、從つて事實 寄稿し、更に一七五八年、有名なる「經濟表」(Tableau Economique) 發表の少し前に「人口、 殊に農業振興及び財政改革 -を目的とせる實践 農業及び商業に関

的分析の結果たり乃至歸納的研究の結果であつた自然法乃至自然的秩序の思想は、今やケネーの門弟に依つて研究 說は完全に一世を風靡し、同時に著るしく體系化されたのである。而して殊にケネーに取つては現實の狀態の實證 續々論文小冊子(註二六) を發表したる以外に、ケネーの門弟の熱心なる努力に依つて、茲にフイジオクラアトの學 成せんとする、熱心なる門弟に取捲かれて、一團の首領となつたのである。而して此の時より所謂フイジオクラア 濟學的諸勞作の中に表明せられてゐる思想及び「經濟表」の中に展開せられてゐる思想を把握し、 の出發點とせられ、 の學說の流布が花々しく行はれたのである。即ちケネー自身一七六五年に「農商業及財政雜誌」(Journal de l'ag-周知の如く「經濟表」發表の翌年一七五九年頃から、ケネーは一躍有名となり、茲に彼は、彼の旣に發表せる經 du commerce et des finance)に自然法に闘する論文「自然權」(Droit naturel)を掲載したるを初めとし、 同時に著るしく抽象的論理的に表明せられ、且つメルシエ・ド・ラ・リヴィエール殊にデュポン・ 而して一派を構

なる發展を見るのである。《註二七》 するに及んで恰もフイジオクラアトの全學説の如くなつたのである。茲に吾人は師ケネーの思想の門弟に依る偉大 「フイジオクラシイ」(Physiocratic)を「自然的秩序の科學」(la science de l'Ordre naturel)と定義

學說に、補足的影響をこそ與へたれ、ケネーの全學說がこれに依つて影響せられて生成したなどとは斷じて考へ得 說體系を作り上げたなどとは、餘りにも當時の「社會の事實」を無視した架空の所論と云はねばなるまい。それこ られないのである。マーカンチリズムの餘弊とアンシャン・レデイムの悪制度との下に呻吟せる當時の下層階級、殊 業救濟及び財政改革に存してゐたのである。從つてそれは又當然當時の現實の狀態を離れて考へ得ないのである。 に農民階級の窮狀に直面しつゝ、ケネーが全然これに影響せられずして、遠く支那思想に影響せられて其の重農**學** アトの學說の流布以前の彼の思想は、其の門弟殊にメルシェ及びデュポンとは反對に、寧ろ當時の現實の問題たる農 **真意に反してフィジオクラアトとなつたのである。<<註二八)故にケネーの真意、殊に其の學説の出所に就いては、吾** 説明せられる。即ち流布者は屢改革者よりも遙かに論理的なるものだと云ふことこれである。…… ケネーは屢彼の ない。フィジオクラアトの學說は全部ケネーの頭腦から出たものではない。即ち其の門弟が師ケネーに及ぼした反 動、彼等が彼の思想に加へた修正し 人はフィジオクラアトの學説の流布せらる」に至つた以前のケネーの思想に溯らねばならぬ。而してフィジオクラ アトの學説の凡ゆる思想の祖をケネーに認めやうとし過ぎる、ケネーの門弟の熱烈なる讚辭を文字通り解すべきで 然らば、瀧本博士の指摘せらるゝが如く、ケネーが後年に支那研究を行つたことはあらう。然しそれはケネーの 故に「…ケネー及びケネーの活動を述べるのに、凡ゆるものを全部彼に歸することは適當でない。フィジオクラ - 綏和嵜しくは誇張等を等しく斟酌せねばならぬ。而して其の理由は…… 容易に

時の社會的事實との關係に於いて論じてこそ始めて意義あるものとなるのである。 事實に影響せられて生じたものと云ふべきであらう。ケネーの思想は當時の社會的事實の反映でありまたこれを當 想は遠き東洋の支那思想に影響せらるゝ前に、寧ろ祖國の眼前に展開せられてゐた悲慘なる農民階級の現實の生活 を樹立する前に、直等現實の農業振興に資することを思想しなければならなかつたのである。即ちケネーの重農思 研究して居るべく、常時の農民の現實の貧窮の度は餘りにも深刻であつたのである。支那學說を研鑚して重農學說 級の救濟にあつたことは明らかである。即ちケネーが、博士の云はるゝが如く、支那の重農學説を單に學說として 農業を重んする関風なることを知り、益々研究を重さねて遂に「種の重農學説を思付きたるものなるべし」と云は を博士自らの所謂「空想空談」(註二九)でなければならない。博士はケネーが「平生農學に熱心なる所に支那が特に 即ちそれは當時の農民に依つて直接實際に適用せらる可きものであつた。其の真意が當時の疲弊せる農民階 抑も最初のケネーの重農學説は、旣述せるが如く、農學と云はんよりも寧ろ卑近の農術を說けるものであ

判に於いてフイジオクラアトの學説の先驅を爲したボアギュルベールの思想の研究に先づ筆を起すものである。 「フィジオクラアトの學説の出所」を斯く解する筆者は、從つて、アーカンチリスム及びアンシャン・レディムの

- Paul Pierre Mercier de la Rivière, L'Ordre naturel et essentiel des sociétés politiques, 1767.
- Pierre Samuel Dupont de Nemours, Physiocratie ou constitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au gure humain, 1768. "Physiocrafie" なる文字が用ひられたのは是を以て嚆矢ミする。
- Ξ Charles Gids et Charles Ri-t, Ilistoire des Doctrines Économiques depuis les Physiocrates jusqu'à nos jours, 1926, p. 6
- John Kells Ingram, A History of Political Economy, 1919 p. 52--に據れば、フイジオクラアトの學說をスミスの學

觑謬さ做せるケネーの重農論を恕せるのも、皆是ケネーの自由主義思想を斟酌したればこそである。要するに、 イジオクラアトの根本思想中、其の自然法思想は重く重農思想は輕しさせられてゐる。 由の學説」なる標題の下に取扱つてゐる。尚ほ多くの古典派經濟學者が彼等の目して明白なる

- 註 註 Ŧi. René Gonnard, Histoire des Doctrines Économiques, De Platon à Quesnay, 1924, p. 177. 参照°
- 註
- 七 て其の結果勞働を可及的低廉に購入する爲に農業を犠牲にした事は必然の勢であらう。 る金銀獲得政策に主力を注いだ事(Gonnard, Histoire, etc., De Platon à Quesnay, P. 140) さ、搗て加へて貴族の反 **抁勢力を弱める爲に、王室が、土地貴族に有利な農業よりも、新興都市を富ます牓工業を助成した事に由る。** は工業的特徴を有する。共れは佛蘭西が自國の鍍山を有せず、且つ國民が勞働的なるが故に、自國工業の發展に依 英國のマーカンチリスムが商業的特徴を有し、西班牙の其れが地金主義であるに對して、佛蘭四のコルペルチスム
- 註 Higgs, The Physiccrats, 1897, p. 5-11. 参照。
- 註 九 Arther Tilley, The Decline of the Age of Louis XIV, 1929, chap. 111, p. 45.74, La Bruyère. 体至o
- 註一〇 價されてゐる。(Taine, L'Ancien Régime, vol. I. p. 430) - 此れは勿論誇張であるさしても、當時の農民の窮乏の甚 だしかつたとさは疑ひない。 一六九〇年さ一七一五年さの間だけで饑饉や貧窮のために死んだものゝ數は全人口の約三分の一、即ち六百萬さ評 1899, p. 113-136. 参照) (Michelet Jules , Histoire de France, Au Dix-soptième siecle, Louis XIV et Le Duc de
- 註 Œuvres de Fénélon. Édit Firmin, Didot, 1835, Tome III. p. 444. Ch. Urbain, Écrit politique de Fénélon, 1921, p.

- 胜二二 Jacque Lelong. Bibliothèque historique de la France, etc. 1769. 今本書中共の主なるもの二三を擧ぐれば次の如し。 Trésor des Trésors de France volé à la couronne par les principaux officiers de finance, découvert et présenté
- fait une démonstration des larcius des financiers et de la justice des poursuites que la Chambre de justice fait contre au roi Louis XIII, par J. de Beaufort, 1615. La chasse aux Larrons ou Etablissement de la Chambre de justice, où se eux, par Jean Bourgoin. Paris, 1618. Nouvelle école publique des finances ou l'Art de voler sans ailes. Cologne. 1708. Cologne, 1710. Adolph. Blanqui, Histoire de l'economiepolitique en Europe etc., 1837. Tome II. p. 389-472. ヒル共 Les partisans démasqués ou suite de l'Art de voler sans ailes, Cologne, 1709 L'Art de plumer la poule sans crier,
- 譜] [1] Herbert, Essai sur la police générale des grains, 1753.
- 描] 回 Dupin, Mémoire sur les blés, 1748.
- 描 1 用 Goudar, Les intérêts de la France mal entendus, 1757.
- 註一六 ぶべし。 ケネーの最初の經濟學的論文「小作人」(Fermiers) 及「穀物」(Grains)(共に一七五六年及一七五七年にデイデロ の「百科辭書」に寄せたるもの)は何れも農業經濟、殊に小作人問題を論じたものである。同論文の内容は後に述
- 能 1 수 Du halde, Description de l'empire de la Chine, 1735.
- 能 1 八 René Gonnard, Op. cit. p. 14-16.
- 註一九 瀧本誠一博士「日本經濟史」(增補新版)四一七頁—四一八頁
- 畫川〇 Higgs, Op. cit. p. 4.

- 註二一 高橋誠一郎「經濟學前史」二九頁
- 描1/11 Hector Danis, Histoire des Systèmes Économiques et Socialistes, 1904, Vol. 1, p. 107.
- 11 二三 Fermiers (Auguste Oncken, Oeusres Économiques et philozophiques de F. Quesnay, Paris, 1888, p. 159-192) 物壁
- 趙门四 Grains (Ibid., p. 193-249) 参照。
- 註二五 同論文に「シュリイ氏の王國經濟の拔萃」(Extraits des Economies royales de M. de Sully) なる題下に「農業王國 政治の一般的格言」(Maximes générales du gouvernement d'un royaume agricole)なる箴言集が附きれてゐることは 周知のとさであらう。
- 註二六 note 2. 及び前掲 Oncken, Oeuvres, etc. p. 145 以下に擧げられてゐる。就いて見られ度しっ 此等の論文小册子は、René Gonnard, Histoire des Dochines Économiques, De Quesnay a Stuart Mill, 1927, p. 22-23.
- 註二七 フイジオクラアトの思想の發展經路を筆者は次の三期に大別し得る三思ふ。
- 實際問題を精細に研究した。 -ケネーの重農思想。 兹では主さして、極めて卑俗的に行はれた現實の觀察に喜心して、實證的分析を行
- 敷衍したが、 -ケネーの自然権思想。故では農業思想を經濟學的思想に、經濟學的思想を社會學的及形而上學的思想に 然し佝依然として農業的及實證的研究の色彩を帶びてゐた。
- 初ケネーに於いて自然法思想よりも寧ろ重農思想が主であつたのに反して、逆に重農思想よりも自然的秩序の思想 乃至自由主義の思想が主こなるに至つた。 -ケネーの思想の熱心な解説者たる、メルシエ及びデユポンに依る、 ケネーの思想の發展の時代。故で最
- 描刊人 Dubois, Préface à la réédifion du livre de Le Mereier, p. VII-VIII.

註二九 瀧本倾士前楊書、四一八頁

選より足の爪先まで改革者たりしものである。」(註三一)然かも其の統計的著述「佛蘭西詳論」(Détael de la France) 學說上に於ける革命の必要を聲高く豫告せる觀あるものであり、而して又ボアギュルベールを以てフイジオクラア 及び和稅の本質に關する論評」(Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs)(註三五)に於い 及び利害に闘する論叢」(Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains)(註三四)及び就中「富、金銀 慘憺たる社會相を描寫し、而して税制改革の急務を主張した彼は、其の學理的著述たる「穀物の性質、耕作、商業 (註三二)及び「佛蘭西の辯護」(Factum de la France)(註三三) に於いて、陰欝な筆調を以て路易十四世治下の暗黒 ジイム及びコルベルチスムに對する完膏なき批判と其の缺陷及び惡弊に對する痛烈なる駁撃とのために、殆ど寧日 (Rouen)に生れ、一七一四年十月十日同地に於いて歿するまで、其の七十餘年の生涯を通じて、一にアンシャン・レ とて無かつたものである。洵に、彼は「十分一稅論」の著者ボーヴァンと共に、路易十四世治下に於ける「頭の天 金銀及び租税)に就いて世に廣く行はれてゐる謬想を發見する」との數語が附加せられてゐるが、實に、本書こそ にし同時に重農的自由的思想を力說したのである。此の最後の著書は副題として「本書に於いて吾人は是等三物(富 の始祖ケネーの直接の先蹤と做し且つ自由主義經濟學の創設者中に數へらるゝに値すると做すことの誇張にあら ボアギュルベール (Pierre le Pesant, sieur de Boisguillebert) (註三〇) は一六四六年二月十七日を以てルアン 時弊の全くマーカンチリスムの所産たるを指摘し、是が批判を行ひ而して是が徹底的反對者たるの旗幟を鮮明

財富論及び貨幣論を中心として敍し以て這點に於いて及び又重農的自由的思想に於いて如何に彼がフイジオクラア財富論及び貨幣論を中心として敍し以て這點に於いて及び又重農的自由的思想に於いて如何に彼がフイジオクラア ざる所以も亦事ら本書に存するのである?註三六)故に、本稿は主として本書中に現れたる彼の經濟思想を特に其のざる所以も亦事ら本書に存するのである?註三六)故に、本稿は主として本書中に現れたる彼の經濟思想を特に其の の先驅的思想を表明したるかを明かにするを目的とする。

- 彼の書翰の一部の模寫參照) 同綴りにて記名せられた様である。(Felix Cadet, Pierre de Boisguilbert, Paris, 1871. の開卷第一頁に掲載せられた、 日の言葉にて所謂「身分證書」の多くには殆ご必ず Boisguillebert ご記名せられ、且つ彼自身の書翰にも殆ご常に 或は Bois-Guilebert き綴り、又或は Bo'sguillebert き綴る等、彼の姓名の綴は當時の諸書類及び公文書に至る迄種 々様々である。彼の弟及び其の他の家族の者は多く Boisguilbert と綴つた様である。然しルアン小教區民簿の、
- 匙三 Paul Louis, Histoire du Socialism: en France, etc., 1925. p. 23.
- 註三二 ボアギュルベールの「富の本質論」 des principaux Économistes, 1851, Tome 1. p. 163-241、に採錄したのは即ち本版であり、圖書及び傳記に關する諸辭 la France, la cause de la diminution de ses biens, et la facilité de remède, en fournissant en un mois tout l'argent dont le roi a besoin et enrichissant tout le monde. なる超下に一穴九七年に出版せられた。(Daire が其の Collection moyens de la rétublir en peu de temps. なる題下にコロンヌに於いて出版せられた。次いで第三版は Le Détail de で其の翌年に本書の一種の摘要さ見る可きものが、I a France ruinée sous Louis X V, par qui et comment, sur les の Bibliothèque historique de la France, etc., Paris, 1769. Vol. II. p. 825. に記載せるは即ち此の刊本である) 次い る。本書の初版は Détail de la France ou Traité de la cause de la diminution de ses biens et des moyens d'y remé ボアギュルベールの青年時代の文學作品を除いて、彼の經濟學的著述に就いて觀れば、本書は其の最初のものであ なる題下に一六九五年ルアンに於いて出版せられ、著者の名さして M. de S なる文字を用ひた。CLelong が其

-0 -(111111)

書も大抵本版を舉げてゐる)尚 Le Détail de la France sous le régne de Louis XIV. (一卷二百十頁) 一穴九丸年なる用版年號を有する別卷がある。 J.-E. Horn, L'économie politique avant les Physiocrates, 1867, p. 70. の考證に依れば、恐らく、本書は僞書にあらずやと做されてゐる。 なる表題さ

能三三 fois davantage de revenu à la France, cest-à-dire plus de 500 millions sur plus de 1,500 anéantis depuis 1661, parce 本書の全表題は次の如し。Factum de la France, ou moyens très faciles de faire recevoir au roi quatre-vingts millions des peuples, sans congédier aucun fermier général ni particulier, ni autre mouvement que de retablir quatre ou cinq par-dessus la capitation, practicable par deux heures de trivail de M M. les ministres et un mois d'exécution de la part autres causes que ce puissent être, sans renoncer à la raison et au sens commun; en sort que l'on maintient qu'il n'y a au temps et à la conjoncture, comme n'étant pas propre à aucun changement, soit au prétendu péril, risque, ou quelques point d'homme sur la terre qui ose mettre sur le qu'on fait voir clairement, en même temps, que l'on ne peut faire d'objection contre cette proposition, soit par rapport perdre d'homme, et qu'on montre en même t mps l'impossibilité de sortir autrement de la conjoncture présente. papier une pareille contradiction et la souscrire de son nom sans se

llebert であり、他の一は 所より推して大體一七〇四年頃に書かれたもので察せられる。本書の出版は普通一七〇七年させらるゝも、遲く共 の著書さ共に公にせられた。此の全集には二種あり(共に一七〇十年刊行)。其の一は(Euvres complètes de Boisgui-一七〇六年より遅る」筈無かりしものであり、現に Quérard 等は一七〇六年ルアンに於いて出版せられた刊本を引 本書は著者自ら本書の劈頭に於いて「十年前に・・・・Detail de la France を題する一書が公にせられた」といへる してゐる。次いで本書は一七〇七年、ボアギュルベール全集刊行に際して、彼の「佛巓西詳論」及び其の他の彼 Testament politique du Maréchal de Vaulban. なる題下にボアギュルベールの諸著を集録

は偉人(ボーヴァン)の名が實際 passe-port こして役立つ事を期待したのである。」こ。此の一七一二年の「ボーヴァ ぬとさを強く信じてゐた。世間の無關心が著者さしてよりも寧ろ市民さして彼には惱ましかつた、そとで此の爲に guillebert (Collection des Principaux Économistes. Tome I. 1851: p. 160) に依れば「此の時(一七〇七年頃)以來、 彼は一七一二年「ボーヴァン將軍の政治的遺習」なる僞の題下に、其の全著書の新なる刊行を行つたのである。彼 ボアギュルベールは其の筆を休めた儘であつた。然し彼は死ぬ迄彼が單に正常且つ有益なる思想を表明したに過ぎ 於いてポアギュルベールを以てボーヴァンの「十分一稅論」の著者なりさ傲せるが如し) 倘 Daire, Notice sur Bois-著者なりご做すに至つたここである。(例へばポルテイルは其の著 Dictionnaire Philosophique, Tome. 1. p. 100. ン將軍の政治的遺者」が再版たるとさは Horn, Op. cit, p. 72-73. の指摘する所である。 るとさは、此の Testament politique, etc. の刊行に依つて誤らされた人が當時相當に多く存し遂には、或はポーヴァ ンを以てボアギュルベールの諸著の著者なりこ做し、又或はボアギュルペールを以てボーヴァンの「十分一稅論」の ふとさであるが、此れに關する考證は前揚 IIorn, L'économie politique, etc., p. 73. に詳細である。たゞ玆に興味あ ヴァン將軍の政治的遺著」の題下に集録せるものさが、然かも同時に、刊行せられたこさを如何に解す可きかざ云 せるものである。そとで問題は、此の二つの全集、即ち名實共の「ボアギュルペール全集」さ、彼の諸著を「ボ

1, P. 241-247)が 此れを Supplément au Ditail de la France さして Ditail の後に附せるは明かに誤にして、此れ 何 Horn, Op. cit. p. 75-76. に依れば、Factum は「附錄」を有するものなるが、 Daire (Collection, etc., Toma Supplément au Factum de la France として Factum の附鉄たるべきものである。

註三四 tous les condition d'un Etat; divisé en dux parties, dont la première fait voir que plus les grains sont à vil prix 本書の全表題は次の如し。Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des Grains, tant par rapport au public qu'à

garantit des funestes effets d'une extrême disette. 本書は其の内容に依つて大體一七〇四一五年の間に編纂せられた plus les pauvres, surtout les ouvriers, sont misérables; et la seconde, que plus il sort du blé du royaume, et plus il se ものなること明かである。

註三五 もそれを削揚 Collection. etc. に採錄したこ云はれてゐる(IIo:n, Op. cit. p. 78) 本書の出版は Traité の出版と Factum の出版との間、即ち恐らく一七〇五年頃であらう。然し Traité にせよ Dissertation にせよ、何れも初版は確知せられない。彼等は一七〇七のポアギュルペール全集中に復刻せられ、 Daire

sonnements du public à cet egard. (Daire, Collection, etc., Tome 1. p. 153) 🛪 🌣 🔊 佝別にボアギュルベールの著書に Traité sur le merité des financiers (Daire は此れに就いては一言だにせず、 Collection, etc. Tome 1. p. 152-3 容照) 及货 Causes de la rareté de l'argent, et éclaircissements des mauvais rai-

描川代 Joseph Rambaud, Histoire des Doctrines Économiques, 1902, p. 129.

Ξ

々にして富裕(opulance)及び金銀(argent)に就いて爲せる考へに於いて誤れる事から生ずるのである。(註三七) 成功せんが為に取る方法に於いて常に誤つてゐる。永久不易たり得べき富の真の獲得に於ける、此の誤は、先づ人 す、多數者が日夜齷齪として勞働する所以のものも一に富者たらんが爲に外ならない。然し人々は此れに首尾よく ボアギュルベールは其の著「富、金銀及び租税の本質に關する論評」の劈頭に於いて云ふ「萬人富者たらんと欲

洵に、萬人汲々として富を求むれども、 然かも富の何たるかを識れる人は尠い。人或は富を以て金銀の所有に在

喜ばせ得る凡ゆる物の全き享有に在る。」(註三八)と。 ば真の富とは何か。彼は之に答へて云ふ、『真の富とは、啻に生活の必需品のみならず、又凡ゆる奢侈品並に官能を 然し金銀が真の富であらうか。ボアギュルベールに依れば、金銀は精々富の要具たるものである。然ら

を得ないものとすれば、「特に人間を養ふことに關する限り、世に此れ程卑しめらる可き物件は他に無かるべく、 然かも「此の金銀は共の殆ど全部を擧げて、鑛山所在國に齎す可く生活必需品を生産せる國々に、持ち行かねばな くて其の如何に多量に存するとも、人嘗てそを尊重する事は無いであらう。(註四二) らぬからである。六註四一)若しも金銀を收受せる人々が全然そを保藏し以て他の如何なる享樂物件とも交換する事 も遙かに不便不快に生活せざるを得ないであらう、何となれば匈牙利に於いては、這般の僅かな金額を以て必要若 乏せんか「人は一日に五十ヱクーを消費するも尙、彼が匈牙利に於いて僅か八スウ若しくは十スウを以てするより 々よりも遙かに富裕なるものでは斷じてない、蓋し其の船隊は年々其の植民地より多額の金銀を本國に齎すと雖も、 境より発れたに過ぎなかつた事は餘りにも確實な事實である。J洵に「鑛山の所在地に於いて」若しも消費貨物が缺 せらるゝ程の一地方の絕對的支配者たりしと雖も、多年間いとも慘めに其の生活を送り、其の多數者の餓死せるは しくは快適の凡ゆる物品を豐富に享受するに殆ど充分なるが故である。C註四O2されば西班牙は歐羅巴の諸他の國 を例證して云ふっ夫の新大陸發見の西班牙人の物語に依つて、其の最初の征服者は、縱令金銀にして樽を以て計量 斯かる財富觀から出發せるボアギュルベールに取つては必然當時の「人々が日夜偶像として崇拜せる、金銀は: 衣食に適せざるが故に、それ自體にては斷じて何等の用途を有するものではないのである。八註三九)彼は此れ 殆ど共の凡ての者は惟だ僅かに自然の與ふる最も惡しき且つ最も厭ふ可き食物に依つてのみ這般の第

の掌中より彼の所有に屬せし生産物が譲渡せられた時の價格乃至其の時の價格に比例せる價格に於てゞある。」(註 が其の買手より受取りたるもの(金銀)は彼に取つては一種の保證附委任狀(une procuration, avec garantie) 引せざる事の愈々頻繁となる時、彼が譲渡する物件の補償として、茲に金銀は役立つに至るものである、而して彼 を直ちに見出す事を得ざるに至るからである。「斯くて一生産物の賣手が彼が現實に欲求せる生産物の賣手と直接取 **剰生産物を有する人が、此の生産物を欲求し而して其の代りに彼の欲求せる生産物、享樂乃至勤勞を提供し得る人** 愈々複雜化するに至れるが故に、最早や直ちに兩者の一致を見る事を得ざるに至る可く、 (註四三)が現る」に至るや、最早其の存續を維持し得るものではない。何となれば今や需要と供給とは愈々增大し、 して、彼の欲望は(彼の欲求せる生物の)賣手が見出さるゝ場合に實現せらるるものである、而してそれは・・・ 彼 に至るまで……自然に依つて最も良く分割せられ而して最も開化せる 完全 なる國家を構成せる二百余種の職業」 從つて是に應ずる生産物も亦多大なるを要せざるに因つて、可讓的物件の相互的直接交換に依つて有無相通じ得た し斯くて先づ人々の勞働が分割せられ、更に職業數が漸增して「麵麭屋、仕立屋等の如き最も緊要のものより俳優 斯くてボアギュルベールに依れば、金銀は、社會が未だ物々交換の狀態に在つた時、 何等の職能無く従つて何等の價値の無かつたものである。然るに、這般の狀態は、三四種の職業が生起 即ち人口稀薄、 即ち他人に譲渡すべき余

くは其の現はれざる時、惟だ將來引渡の保證 (le gage de la tradition future) たるものに過ぎず又當に過ぎざるべ に實現せられざる時及び又言葉若しくは書狀に依る引渡の保證に對し、買手に於いて充分の支拂能力が存せず若し 「故に金銀が世上に要求せられたのは、惟だ髙々交換の保證としてゞあるに過ぎない、「註四五」「それは引渡が直ち

生産物に對して保有して居る可き均衡が、軈て甚大なる打撃を受けたからである。穴註四九) る。これ金銀が其の本來の用途に抵觸し初むる傾向を帶ぶるに至つたためである。即ち……金銀が其の他の凡ゆる すれども、然かも殆ど必需品すら所有する事無く、否時に全然其れすら剝奪せらるゝ事のある階級とは即ち是であ 果を享樂し、斯くて神の秩序に全く反くに至るのである。而して此の隨落がいとも過度になつたが故に、今日人々 は完全に二箇の階級に分たるゝに至つたのである、何等爲す所無く然かも凡ゆる快樂を享有する階級と、日夜勞働 て、『犯罪と暴行とは、時と共に、增加し、最强者たる者は何物をも爲さんと欲せずして、然かも最弱者の勞働の結 同時に二人の君主であつた」時代、即ち「其の一人は穀物を得るがために地を耕し、他は着物を作るがために羊を飼 めんとするであらう。斯くて、人々が金銀を渴仰するに至れる結果は、嘗て「此の世の二人の最初の勞働者であり、 ざるものである。即時現金ならば、然る可き販賣價額の牛額以下、否其の四半額にても、能く彼の用を辨ずるもので び倉庫を滿たして置くことなどには留意せざるものである。斯かる配慮、希望、乃至心配は彼の如き生活には適せ きものである。八龍四六)されば、それは謂はヾ一種の彌縫具たるべきものであるに拘らず、軈て最も偏愛せらる 有せざる輩は、然るべき時季に然るべき時價にて賣却せんが爲に、穀物及び其の他の土地生産物を以て其の家屋及 のとなつたのである。 而して彼等の為し得たる相互的交換が彼等をして互の勞作物を互に享受せしめた」(註四八)時代 は茲に 一變し 」(鮭四七)他方、何等か快適物件の所有者は是を金銀と交換し、以てそれだけ彼等の財産を保持し易からし 何故か。「快樂を欲し然かも其の快樂を滿足せしむるために其の全生活に殆ど充分なる余裕

との間に當に在る可き均衡を攪亂するものである。人が金銀取立ての爲めに持つ苛酷と其の他の一切諸物に就て爲 洵に、人が金銀を尊重し而して凡ゆる種類の消費貨物を蔑視することは「恐ろしき程に金銀と凡ゆる種類の物件

結合し且つ最も激しく狂怒した時と雖も、金銀が生贄に供せしめた程多數の人間を破滅したことは嘗て無かつたの で無く、寧ろ惟だ其の食慾を唆るに過ぎぬものである。而して、人間の生贄はと云へば、凡ゆる天災が、最も强く 地でなければならぬ。嘗て最も高價なりし、顯位顯官、否縱令一地方全體すら金銀に取つてはさまで十分なるも 銀の籠遇を贏ち得んと欲するならば、不動産を獻上しなければならない、然かもそれとて廣大且つ豐饒極り無き土 て貪婪なるものである。「人々は常に金銀に對して、少しでも金銀に嫌はれる貨物は一切之れを獻上せず、若しも金 **慾極り無き悪魔であつた。ボアギュルベールに從へば、金銀は正に此の魔像モロックの如く否それ以上に残忍にし** 對しては禽獣を、彼神に對しては果實と酒類とを'而して極り無き無分別の事には'不幸にも 或る人命 を すら奉獻 なるに至つたのである。貧婪なる「古代の諸邪神に對して人々は凡ゆる物を生贄に捧ぐるを常とした。即ち此神に 事物の地位は全く首尾顚倒するのである。交換に仕ふ可き金銀が一切を支配する。即ち「今や交換の奴隷は其の暴事物の地位は全く首尾顚倒するのである。交換に仕ふ可き金銀が一切を支配する。即ち「今や交換の奴隷は其の暴 君となつてしまつたのである。」(註五一)然かもそは凡そ吾人の想像し得る最も殘酷にして且つ最も貪慾なる暴君と した・・・・」「註五二⟩ 夫の古代フェニキャのカナンの民が子供を生贄に供したモロック (Moloch) と云ふ偶像は殊に貪 す浪費とは、前者をば雲の上まで上げ崇め而して後者をば奈落の底まで下げさげすむものである。公註五〇)斯くて

財貨のみを掠奪し得るに過ぎず、然かもそれを持ち去らんがためには、隱し得ざる多くの馬と車とを要するもので ある」、註五四)が、金銀の存在は遺般の不便を除去するからである。又例へば、掛にて買つた商品をは廉價、但し現金 幾多の犯罪は金銀に依つて始めて可能となる。少く共非常に容易となるものである。例へば竊盜の如きこれであ 何となれば「若しも凡ゆる財産が生活に必要なる貨物に限られてゐたとすれば、盗賊は・・・一度には唯少量の

義務を発かれてゐるが如きことは斷じて常識では云ひ得ざる所である。〈註五六〉 者が共の中十ミュイを十分一稅として提供してゐるのに、一百ミュイの葡萄酒收穫者が僅か二ミュイの納稅を以て 地主よりも遙かに重く課税せられてゐるのである。若しも金銀が存在せず、而して租稅が物納であるとすれば、三十 スチェの小麥を收穫する人が其の中四十スチェを政府に納稅することや、二十ミュイの葡萄酒を收穫する葡萄栽培 ある。即ち金納税なればこそ屢納稅力以上に徵稅せらるゝ事があり、且つ槪して一片の土地の所有者が其の隣の大ある。即ち金納稅なればこそ屢納稅力以上に徵稅せらるゝ事があり、且つ槪して一片の土地の所有者が其の隣の大 行はるゝものである。(註五五)更に例へば、和稅に就いて行はるゝ多大の不公平及び暴戾の如きも亦金納なるが故で行はるゝものである。(註五五)更に例へば、和稅に就いて行はるゝ多大の不公平及び暴戾の如きも亦金納なるが故で 而して其の賣上金額を持つて逃亡する所の、商人の詐欺的破産の如きも金銀が存在すればこそ

過度の尊重は全く這般の平衡狀態を破壞するものである。 正常なる利潤を獲得する事を得、續いて彼等が其の譲渡物件の代りに、其の渴仰せる物件を獲得する事を得るが爲 のは平衡を以て其の本義とするものである。萬人が其の勞働の所産を現金と交換し而して其際生産の勞苦に對して 金銀の弊害はこれだけではない。謬見に因る金銀の過度の尊重は又凡ゆる交易をも顚覆するものである。由來交金銀の弊害はこれだけではない。謬見に因る金銀の過度の尊重は又凡ゆる交易をも顚覆するものである。由來交 各物件の價格が人為的に暴騰せしめられず、又暴落せしめられざる事を要するものである。然るに、金銀の

は衰亡するのである。洵に「這邊にこそ紊亂の原因も又紛亂の本體も存するのである」(註五七)が、然かも人これ て金銀が除りに高く評價せらるゝ結果は一切諸物の價値が低下せられ、一切諸物の價値が低下せらるゝが故に一切 格が共の生産費を補償し得ざる點に迄引下げられた事は屢であつた。されば、此の不平衡の下に農業の衰徴するの格が共の生産費を補償し得ざる點に迄引下げられた事は屢であつた。されば、此の不平衡の下に農業の衰徴するの は明かであり、然かも共の反動は軈て必然商工業等諮他の産業部門をも强く襲はずんば已まざるものである。斯く 金銀を過度に尊重する場合に於て、就中小麥の蒙る影響は大である。ボアギュルベールに從へば、當時小麥の價金銀を過度に尊重する場合に於て、就中小麥の蒙る影響は大である。ボアギュルベールに從へば、當時小麥の價

六し 易ならしむるためにのみ採用せられたに拘らず、今や萬物に對する死刑執行人となれる、fatal métal である。〈註 で上る」、註六〇とのである。而して今日存在する金銀は正に此の後者である。即ち、 こそ奴隷たらずして神たらんと欲せるものであり、個人に對し否全人類に對して闘を宣したる後、遂には王座にま して常に交易に仕へんとするものであり、吾人が攪亂せざる限り、聊も交易をば攪亂せんと欲することなきもので ルに從へば、金銀に二種ある。「其の一は argent bienfaisant にして、これは世上に於いて其の天與の使命に服し而 ある。八誰五九)即ち交易の奴隷としての金銀である。然るに「他の一は argent criminel なるものである、」「これ に氣付かざるが故に、遂には「萬物の豐富の眞只中に在つて極り無き貧困を醸成するに至るのである。」〈註五八〉 茲に於てか、金銀の齎す弊害は其の得しむる利益よりも遙かに大であると結論し得べきである。ボアギュルベー 本來「惟だ商業乃至交換を容

註三七 註三八 Ibid. ch p. 1V, Ibid. p. 383. Dissertation sur la nature des richesses, chap. I. Daire, Collection des Principaux Économistes, 1851, Tome I. p. 372

註三九 Ibid. chap II, Ibid. p. 374.

Ibid. chap. I. Ibid. p. 372-373.

註四一 且つ同様の例節を授用したとさである。(Daire, Collection, ctc., p. 50-51) 劈頭に於て、金銀さ富さを混同せる當時一般の偏見を辯駁したのも亦ポアギュ Détail de la France, chap. XVIII, Taire, Op. cit. p. 198. 尚兹に興味ある事はボーヴァンが其の「十分一稅論」の ルベー ルと殆ど同一の言辟を以てし

註四二 Dissertation, etc., chap. II. Daire, Collection, etc., p. 375.

註五八 胜五九 批五七 註五六 註 五.〇 計四八 註五五五 註五四 能工三 註五二 武 批叫儿 註 四 七 龍四六 註四五 批四四 Ibid., Ibid. Ibid. Ibid., Ibid., chap. III, Ibid., p. 378-379. Ibid. Ibid., Ibid., chap. III, Ibid., p. 381. Ibid., chap. III, Ibid., p. 378. Ibid., chap. III, Ibid., p. 377-378. Ibid., chap. III, Ibid., p. 377. Ibid., Ibid., chap. Ibid., chap. II. Ibid., p. 375. Ibid., chap. II. Ibid., p. 375. Ibid., chep. IV, Ibid., p. 385. Ibid., chap. chap., chap. chap. III, Ibid., p. 378. chap. IV, Ibid., p. 384. III, Ibid., p. 378. IV, Ibid., p. 386. V, Ibid., p. 395. VI, Ibid., 399.

ボアギュルペールの「富の本質論

指六O

Ibid.

超六1 Ibid., chap. V. Ibid., p. 394.

Щ

或種の貝殼が、・・・ 金銀と等しき力を有し、且つ金銀と等しく其の住民の買はんと欲する物件の將來引渡の保證を得 金銀より以上に生活必需品を得しめたからである。マルディヴ(Maldives)諸島に於ては、其の住民は種々の物語 て、金銀と等しき力、等しき利便を有せるものである、何となれば、そは秘露(Pérou)及び新大陸に於ける多額の (註六二) 共の負へる職能をば何等か他の物件に移す事に依つて「金銀を不用且つ不動たらしめて置き共の凡ゆる誇 に依つて知られ得るが如く、文明且つ華美にして、斷じて野蠻ではないが、其處では小饕に容れて授受せらるゝ、 煙草に就いては、恰も何れの國に於けるを間はず、其の通貨に就いてと同樣、 と欲した時には、彼は一定の價格を有せる、 を知らずに居た・・・。 唯煙草のみが凡ゆる取引に用ひられて居た ・・・。 即ち若しも人が約一スウ分の麵麭を買はん りを閉ざす事を餘儀なくせらる」であらう。公註六三)然もそは洵に易々たる事である。彼は云ふ、銅及び青銅は、 ボアギュルベールに從へば、貴金屬が唯一の絕對的必要に應じ得るものではないのである。然らば「金銀を免職し」 しむるのである・・・。

亞米利加の諸島は、縱令金銀が豐富なるに拘らず、久しく日常の取引に金銀を使用すること 人は屢皮を以て貨幣としたではないか、然かもそは皮其物には何等の價値とて無いが、皮面にある君主の銘刻に依つ 人是を以て多量に貨幣としてゐるものであるが、彼等は能く金銀に代位し得るものではないか。或る場合に於て、 若しも惟り貴金屬のみが絕對的必要に應じ得る唯一のものとすれば、其の弊害も從順に承認すべきである。然し 此の土地の産物(煙草)の同額分だけを與へたのである、而して此の 何等の異議も無かつたのである。

たのである。」(註六四) 斯く唯煙草を用ひただけで、 必需品、快適品及び奢侈品も他所に於けると等しく毫も缺如することはなかつ

るのである……即ちそれは金銀に對抗せしむるに、前述せるが如き、徵集の勞苦を要する、皮、貝殼乃至煙草を以 共處には毫も金銀の助力を俟たずに、普遍的富裕、即ち財貨の大なる享有と消費とが存するのである。気証六五) てせずして、實に何物にも値せざる一片の紙片を以てすることこれである、然もそれにも拘らず此の紙片は何百萬 更にボアギュルベールに従へば、金銀無しに濟ますためには、貝殼、皮、乃至煙草すら備ふる必要がないのであ 即ち「歐羅巴には・・・・遙かに簡易にして且つ遙かに廉價なる一手段があり、而してそれが毎日實施せられてゐ **否無限に、即ち此の紙片の流通する人の數だけ、金銀の凡ゆる職能に代位するものである・・・。 斯くして**

る。」(誰六八) 否益々「人々は費用を節減するのである、而してそれが貧困、從つて金銀の稀少を増大する不幸の源 のみである。(〈註六七〉又「如何なる理窟を以てするも・・・ 此の金銀を少しでも循環せしむる には多く は無效であ は龜の歩むが如く徐々に循環し、而して事件の偶發は金銀の循環をして愈々緩徐たらしむるに資するのみである: ないであらう。金銀が珍重せらるゝのは繁榮の反對たるものである。「富裕時に於ては、家に金銀が入り來るや否や、 |M時に於けるよりも百倍も多い消費從つて所得を生ぜしむる事を常とした。「、註六六」「然るに貧困時に於ては、金銀 人はそれを支出せんと考へた。斯くて金銀は、恬然として、同一日に屢百軒以上の家を循環すること、換言すれば貧 て繁榮すること愈々大なれば、金銀が渇望せらる」ことは愈々小となるであらう。否人々は金銀を欲することすら · 。斯くて金銀を支出せしむるためには非常な工夫を必要とするも、然も概してそれは勞力と時間との空費たる 故にボアギュルベールに依れば、金銀は富の本質たるどころか、其の片影ですらないのである。一國が農業に依つ

ボアギュルベールの「富の本質論」

泉となるのである。」(註六九)

ある。 それを世上に再び齎し…・ 若しくは…・此の金銀を商業に投入することが保證せられなくなるからそれは金銀たり 流出するを阻止せんと工夫するは徒勞である。反マーカンチリスト的思想家としての彼の面目洵に躍如たるものが あれ、斷じて其の原因ではないのである。されば貧困を防止せんがために、國内に金銀を誘致し而して其の國外に 得ざるに至るが故に・・・ 吾人は一切が失はれると云ひ得るのである。(\註七一) 即ち金銀の缺乏は貧困の結果でこそ 銀は其の正常の價値通りに評價せられてゐるが「貧時に於ては、惟り金銀のみが富であり又富であると稱せられ、 するに至るからである。然し金銀は可動なることに依つてのみ金銀たり得るのである。それが不動となるや否や、 爾餘一切諮物は單に塵埃気蝕七〇ン、即ち無價値物たるに過ぎぬと做され、斯くて人々が擧つて惟り金銀のみを愛藏 こそ致命的窮乏の原因が存するのである。然らば又何故に金銀は循環しないのか。彼に從へば、富時に於ては、金 ば何が故に貧困であるのか。ボアギュルベールに從へば、それは一に金銀が循環しないからである。洵に、其處に 故に、金銀が缺如せるが故に貧困であるのでなく、貧困なるが故に金銀が缺乏してゐると云ふべきである。然ら

組长刊 Dissertation, etc., chap. II, Daire, Collection, etc., p. 375.

能六三 Ibid.

盐六四 Ibih. p. 375-376.

描六五 Ibid., ch.p. II, Ibid., p. 376-377.

ボアギュルベールが金銀に代位せしめんさした「一片の紙片」さは、 一種の商業手形にして、 本來の意味に於け

彼の財産の現價値に絕對に歸着するものである。r(Ibid., p. 394) さ云へる所より彼が無法なる商業手形の胤發を 後結局共の最初の振川人の許に歸るのである。」(Ibid., P. 377) さ云へるは皆商業手形のこさである。斯(て彼は一 **班しめてゐたとさは明らかである。** 種の手形交換所の制度の擴充に依る、商業手形の普遍的流通を欲求し且つ推賞したのである。倘は「是等の手形:種の手形交換所の制度の擴充に依る、商業手形の普遍的流通を欲求し且つ推賞したのである。倘は「是等の手形: 現命の片影すら嘗て見たこさがない。凡ゆる取引は爲替乃至手形に依つて行はれ、而してそれは無數の人手を經た (Ibid. p. 376) 云々さ云ひ、又「リヨンの大市を構成せる八千萬以上の販賣及び轉賣取引に於て、吾人は一スウの(Ibid. p. 376) 云々さ云ひ、又「リヨンの大市を構成せる八千萬以上の販賣及び轉賣取引に於て、吾人は一スウの る兌換券ではない。即ち彼が「世間周知の確固たる富に依つて築かれた絕大の信用を有する知名 の 商人 の 手形」 を有效たらしめる生命は、共の振出人の確固たる支振能力であり、而して共の支拂能力は、動産不動産を問はず

以 Dissertation, etc., chap. V, Daire, Collection, etc., p. 394.

這六七 Ibid., p. 395.

註六八 Ibid.

註六九 Ibid.

註七〇 Ibid.

超中 1 Détail de la France, chap. XIX Daire, Collection, etc., p. 201.

尚マルクス「經濟學批判」(猪俣津南雄譯、マルクスーエンゲルス全集第七卷第五一一頁) 参照。

五

以上筆者は可成り詳細に亙つて大體「富の本質論」 ボアギュルペールの「富の本質論」 中に現れたボアギ N べ 1 N 0 反マーカンチリスト的經濟思

1.五 ()二三五)

彼の思想が軈てケネーを首領とするフイジオクラアトを通じて開花し以て自由主義經濟思想を生むに至つたことを でなかつた。ボアギョルベールは正に鋭き批判と正しき認識とを以て此の任務を勇敢に果したものである。加之、 想へば、彼の功績や洵に沒す可からざるものがある。 撃することは、縱令それが時代的要求であつたとしても、正に獨創的且勇敢なる思想家に非ざれば能く爲し得る所 が當時の佛國政府の主張否殆ど國家の宗教となつてゐた。故に、斯かる主張否國敎の愚劣且有害なるを指摘し、 于涉(三)貿易平衡主義(四)商工的組織統制々規、海運業及植民政策上の排他主義及び(五)國際的嫉妬は、其の悉く なるものはなかつた。然かもゴンナアル(註八〇) の所謂マーカンチリスムの本質たる(一)重金思想(二)國家後見及 い。旣述せるが如く、所謂反マーカンチリスト的思想の樹立にして凡そ當時の佛蘭西よりも必要にして且つ必然的 アにサルマシクス(註七九) 等を擧げ得やう。然し此等のことに依つて彼の學說的價値は聊かも失はるゝものではな れば英國にペテイ、(註七六)獨逸にカスパアル・クロック、(註七七)伊太利にアントニオ・セルラ(註七八)及びバダヴィ は聊か當を失するものである。又這般の思想の表明は當時の歐洲に於いて彼が唯一のものでなく、是を外國に求む ンとは、富は主として貴金屬より成るてふ、一般的思想を反駁した最初の著者である」と做すデール(註七五)の言 の區別は、彼を以て嚆矢とすべきものでなく、溯れば旣に「第十四世紀最大の佛國經濟學者」ニコラウス・オレス と、是を以て斷じて富に非ず、單に交換要具乃至流通手段に過ぎぬと做せる點である。固より、富と金銀との概念 ミウス(註七三)否アリストテレス(註七四)の所論中に見出さるゝものであり、從つて「ボアギュルベールとボーヴァ た。彼の所論の根幹は、明らかに、マルクスも指摘せるが如く、《註七二》金銀貨幣に對する熱狂的な攻撃

然らば彼とフイジオクラアトとの關係如何。最後に此の點を一言して本稿を終らう。

曰く、「金銀は賣買される凡ゆる物を運ぶ謂はゞ河川である。」(註八三)と。 斯くてボアギュルベールに於けると等 に依つて金銀を獲得するのは單に購買に依つてそれを支出するがために外ならない。」(註八二)。と更に又メルシェ しく今やフイジオクラアトに於ても亦金銀は單に交換要具と看做さるゝに至つたのである。 トローヌ曰く、「金銀は單に賣買の間に介在する保證(gage)たるに過ぎぬ、そは商業の目的ではない。吾人が販賣 ユ以外に一國に於て他の何等の效用をも有せざる不生産的富たるに外ならないからである・・・。」、註八一) と。又ル に在つて活動的にして且つ真に有利なる富たるものである。何となれば貨幣は其れ自體に於ては賣買に使用せらる 賈買間の媒介的保證(gageintermédiaire) である。金銀はそれが財貨と財貨とを交換せしめる限りに於てのみ一國 惟り消費財を流通せしむることを職能とする機關に過ぎぬと做した。先づケネー曰く「金銀貨幣は諸國民に取つて 旣述せる彼の思想は殆ど其儘フイジオクラアトに依つて繼承せられたと見て差支無い。即ち彼等も亦金銀を以て旣述せる彼の思想は殆ど其儘フイジオクラアトに依つて繼承せられたと見て差支無い。即ち彼等も亦金銀を以て

富とを對立せしめ、〈註八六〉、貨幣の形態に於ける富は其の代位せられたる第一次の富を表示する第二次的富に外な富とを對立せしめ、〈註八六〉、貨幣の形態に於ける富は其の代位せられたる第一次の富を表示する第二次的富に外な らない」(註ハモ)と做し、恰もボアギュルベールが奴隷(金銀)をして主人(消費財)の後から歩ましむるの至當を力說 とは即ち享樂する手段「註八五〕即ち消費貨物であると。而して彼は貨幣の形態に於ける富と生産物の形態に於ける のではない・・・・一國の富を決するものは貨幣の形態に於ける富の多少ではない。八龍八四)と。又メルシェ曰く「富 る價値を有することに存するのである。ケネー曰く、「一國民の富は貨幣の形態に於ける富の量に依て決せらるゝも 同時にフイジオクラアトに依れば、諸國民の真の富は多額の金銀を有することに存せずして、此の金銀を購ひ得 此の第二次的富を以て「第一次的富の後から歩む」(註入八)べきものと做してゐる。

斯くて彼等に依れば、金銀の無限の蓄積は無意義となる、何となれば以後金銀は消費財に從屬せしめられ、其數斯くて彼等に依れば、金銀の無限の蓄積は無意義となる、何となれば以後金銀は消費財に從屬せしめられ、其數

量は其の遂行すべき媒介的職能に必要なる限度に制限せらる」に至つたからである。即ち從來何等の制限を受けて ねなかつた金銀は今や全く organe conditionne となるに至つたのである。〈註八九〉

に、彼等は是を以て唯一の生産的階級と做し、茲にフイジオクラアト獨特の重農論「純生産物」論は發生するので 及び商業階級(分配機關)が存すること」なるが、然も此物質の總量を増加し得る者は惟り農業階級のみなるが故 に分配せらるゝものであり、茲に夫々の職能を掌る機關として農業階級(物質の抽出機關)、工業階級(加工機關) 欲望の滿足に資するものであるといふ事である。斯くて彼等は物質を以て富の本質と思惟するに至るのである。 て彼等に從へば、此の欲望充足に資する物質は、先づ、外界より抽出せられ、變形加工せられ、次いで社會の全員 而て彼は此の外界より凡ゆる物質を得るものであり、此の物質こそ彼の身體の不斷の維持發展及彼の物的並に心的而て彼は此の外界より凡ゆる物質を得るものであり、此の物質こそ彼の身體の不斷の維持發展及彼の物的並に心的 である。而して斯く自然に復歸せる彼等の眼に先づ映じたものは、即ち社會人は外的物質界に從屬せるものであり 向くるに至つた事は必然の勢である。即ち、それは、一新見地に於ける、第十八世紀全般の特色たる自然への復歸 關係を顚倒せしめたフイジオクラアトが、其の注意を、消費財の社會に於ける生産及び分配を律する法則の探求に 斯くの如く、生活に有用なる、 若しくは吾人の欲望を滿足するに適切なる、凡ゆる物件と金銀との間の

國家の二大乳房である。」(鮭丸1)「農産物の増加あつて初めて辯護士、醫者…… は働き得る。 從つて不毛の地方に此 て、土地乃至農業の重要性を指摘して曰く;一國の富は其土地と其商業とに在る?(註九〇)「農業と商業とは凡ゆるて、土地乃至農業の重要性を指摘して曰く;一國の富は其土地と其商業とに在る?(註九〇)「農業と商業とは凡ゆる の歸結である。彼の財富論から重農論に達するには一歩にして足るであらう。即ち彼はフイジオクラアトに先立つ 然も、旣に、吾人の觀たボアギュルベールの財富論より、彼が亦上地を富の源泉と做すに至れる事は極めて自然

るものは農産物、 の種の人々を殆ど見ざるに反して、然らざる地方には彼等は多數存在する。云註九二)即ち、凡ゆる職業を活動せしむ 殊に小麥である。」(註九三)と。

對する大なる侵害を止める事のみが必要である。」(註九五)「自然をして爲すに任せよ、」(註九六)「自然は惟だ自由の 關稅の廢止と輸出の完全なる自由、要之、自由放任政策に依て獲らる可きものである事を强調して、實に又フイジ みを呼吸する。(註九七)と。 オクラアトに先立つて自由主義者たるの旗幟を鮮明ならしめたのである。曰く「常に自由と完全とに向ふ、自然に 當價格」說の先驅をなし、更に其の後半に於て、此の生産費補償價格が、國家的法規に依て獲らる可きものでなく、 る貨物の充分高き且變動せざる價格こそ、生産者は固より結局消費者の利益たるを論斷して(註九四)ケネーの「相 らない。彼の別著「穀物論叢」は正に此の急務なるを主張せるものであつた。即ち彼は同著の前半に於いて、 而して此の重要なる農業を恢復するには、必然農産物、殊に小麥に其の生産費を補償し得る價格を得しめねばな

將た自由主義思想と云ふ、曷是ボアギュルベールに於いて旣に明白に表明せられたものではないか。吾人は彼に於 を重ずるの必要を旣に知悉してゐた事の慧眼」に敬服した後附言すらく「若しも彼にして土地と水とが人間の勞働 ボン・ド・ヌムールは「ボアギュルベールが當時世人の知らざりしこと、即ち有效勞働の立替と商業の自由の利益と てフイジオクラアトの諸思想を明確に豫見し得る。彼等がボアギュルベールを尊重したのも宣なる哉である。デュ の區別を識り得たならば、又若しも彼が此等の真理に加ふるに彼の旣知の諸他の真理を以てしたならば、吾人は彼 に依て富を引出し得る唯一の源泉である事を知つてゐたならば…… 若しも彼が純生産物の存在及び其の再生産費と 依是觀之、フイジオクラアトの反マーカンチリスト的經濟思想(殊に其の反重金思想)と云ひ、重農思想と云ひ、

に經濟學の諸原理の發明の名譽を負ふものである。公註カハンと。

等の記念塔を建設すべき素地の障碍を豫め除去するに於て大いに資する所ありしものである。」(註九九)マルクスが 其の著「經濟學批判」(註一〇〇)に於いて、佛蘭西の古典經濟學を以て、實にボアギュルベールに始まると做したの も洵に放なしとしない。 可きである。即ち「彼は這個建設に建多の貴重なる材料を運び且つ備へ而して軈てフイジオクラアトが其の上に彼 然り。ボアギェルベールは勿論經濟學の建設者ではなかつた。然し這個建設事業は明らかに彼に始まつたと云ふ

註七二 マルクス『經濟學批判』前掲書、第四四五頁

註七三 高橋誠一郎「經濟學前史」第四九四頁殊に第四九七頁

註七四 高橋誠一郎「經濟學前史」第一一四頁

描中语 Daire, Collection des Principaux Économistes, Tome 1. p. 50. Note.

註七六 René Gonnard, Ilistoire des Doctrines Économiques. Tome 1. p. 220. 以下殊以 p. 231. 参照

註 七 七 Caspar Clock, Casparis Clocki Tractatus de Aerario, sive censu per honesta media absque divexatione popoli licite conficiendo libri duo, Nurembergue, 1651. J.-E. Horn, Op. cit. p. 107-108.

Antonio Serra, Dalle carceri di Vicaria oggià 10 di luglio 1613. Breve trattato delle cause che possono far abondare li regni d'oro et d'argento dove non sono miniere con applicazione al regno di Napoli, del dottor Antonio Serra, Naples, 1613. Horn, Op. cit. p. 109-111. 高橋誠一郎、前揭書、五三八頁. 一五四二頁

胜七九 Salmasius, De usure. -De modo Usurarum.-Dissertatio de fœnore Trapezitico, Leyde, 1638 à 1640, Horn, Op. cit. p.

脏八〇 René Gonnard, Op. cit. p. 88-90.

Observations sur l'intérél de l'argent. Oncken, Œuvres économique et philosophique de Quesnay, 1888, p. sur la Maxime XIII, Oncken, Op. cit. p. 348

註八11 Hector Denis, Op. cit, p. 76.

蓝八川 Le Mercier, L'ordre naturel, etc., édit Depitre p. 290.

起入回 Maximes de gouvernement économique, Oncken, Œuvres, p. 238-239.

超八五 Le Mercier, Op. cit. p. 292.

超八六 lbid., p. 293.

能八七 Ibid., p. 292

进八八 Ibid., p. 292.

能八九 Hector Denis, Op. cit. p. 77.

进入O Détail de la France, chap. VII, Daire, Collection, ect., p. 169.

盐九] Ibid, chap. XXI, Ibid., p. 204

註九二 Ibid., chap. II, Ibid., p. 165.

胜九三 Dissertation, etc., chap. IV, Collection, etc. p. 386.

出九回 Traité des grains, Fremière partie, chap. IV, V et VIL

胜九五 Disseration, etc., chap. VI, Collection, etc., p. 401.

旺九六 Ibid, chap. V. Ibid. p. 390.

ボアギュルベールの「富の本質論」

註九七 Traité des grains, chap. IX, Collection, etc., p. 366.

盐九八 Notice abrégée des différents écrits modernes qui ont concouru en France (Ephémérides ducitoyen. septembre. 1769.). J. Rambaud, Op. cit. p. 131, à former la science de l'économie politique

胜九九 Horn, Op cit. p. 357.

註一〇〇 - マルクス「經濟學批判」(前掲書。第四四二頁)

—— 九 三 二·五·二七—

9

思想を紹介し且つ口を極めて稱揚してゐるのである。財政改革思想に於てケネーがボアギュ 同著の紹介に主力を注ぎ、而て此れに意外の紙敷を費したゝめに、本稿の冒頭に於てフイジオクラアト學説の根幹を以て 記述せるが如く、經濟的自由主義の先蹤さしてのポアギュルペールの業蹟は先つ其の著「富の本質論」に於けるマーカン 明せるものさしてポアギュルベールの「佛蘭四詳論」を引用して、同書中に表明せられたるポアギュルベールの税制改革 論述せざるを得ず、殊に財政改革思想に於ける兩者の關係に就いては殆ご言及し得なかつた。然し此の點に於ける兩者の <1∋重農思想<1∋自然的自由思想及び<三)財産改革思想さ做し、從つて當然此等の三點に於てボアギュルベールさフイジ 關係も亦極めて密接なものである。即ちケネーは其の Note sur le Maxime XXVI, Oncken, Oeuvres, p. 357-358 に於て チリスム批判に始まる。此の意味に於て同署は經濟學說史上重要な地位を占む可きものであり、從つて筆者は本稿に於て み専心して根源に溯つて觀ない時には、政治家も凡ゆる注意及び努力を全く無效ならしむるを逃べ、 一國の財政的衰微を恢復するの難事たるを説き、而して益々増大する破壊的原因は、若しも人々が唯結果を抑靡する事にの オクラアトさの關係を論述すべきであるに拘らず、重農思想及び自由主義思想に於ける兩者の關係に就いては極く簡略に ペールに数へらる」所あり 當時這般の原理を證

しは明らかである。

それらは皆稿を更めて詳論し度い。倘以上の外にボアギュルベールの地代論及び連帶思想等幾多論述せらるべきものがある。

ボアギュルベールの「富の本質論」

111m CI 川岡川)